

記紀の記事に就て、古人の註釋による整理に終始して居る。然し記紀は勿論この國の成立と發達の記録であつて人民の生活を對象としてない。従つてそれに見ゆる資料にのみ依頼する時、「賣買・貸借・奴隸解放の如き行爲に就て、行爲の方式として傳へられたものがなく假に在つたにしても見るべき程のものはなかつた」と推定せられる(一四四頁)。然し古代經濟制度に就ての研究は今の社會人類學者の課題でありまた斷片ではあるが型の設立が試みられてゐるものがある。(二)に認識の對象に就て、法を「社會連帶の有形的シンボル」とするデュルケームの説を参照する廣き立場であつて、又魏志に見ゆる卑彌呼國の記事が日本法制史上に重要な資料を含む事を認められつゝ、政治の形式に就いて一部學界に存在を信ぜられてゐる女人政治に言及されなかつたのか、又家族の條で母系家族の存在に就て今一應の考察が費して頂きたかつた。これは上代社會生活の基本的のものであらうから。又これと關聯して婚姻法もより組織的に理解されるのでなからうか。

紹介はたゞ上代に止るのを遺憾とする。菊版六三五頁を費して朝廷廷法時代上を終る膨大な組立であるがそれが一貫した立場から整理されて渾然たる一體系を作れる事は從來かゝる方面に乏しかつた學界の大きな收獲であらう。然も尙精緻な記述と該博な引證とは論文集としての特色も兼ねたものと思はれる。「ほのほのミ光明に接したるが如くに思へて」組織的なる叙述の一部をなされた著者の努力と光榮を祝しその完成を祈りつゝ、一夕研究室において親しく淳々として訓へを賜はつた厚誼を思ひつゝ、かゝる蕪辭を連ねた事について寛容を乞はねばならない(菊版六三五頁、弘文堂發行、價四、〇〇)(藤)

● 日本宗教史の研究

長沼 賢海著

宗教史の研究者としての著者の過去二十年間の業績を蒐めて一卷としたもので「親鸞聖人の研究」「蓮如上人に一揆運動」「念佛僧の妻」「天満天神の信仰の變遷」「倭寇とバハン船及寶船」「西宮えびす神」「安藝門徒と嚴島及び石山の戰爭」「大黒天の形容及び信仰の變遷」「同上續篇」「天草のはなれ切支丹の研究」「宗像神社の阿彌陀經石」「時頼

の廻國説ミ其信仰」「平戸島の離れ切支丹」「切支丹ミ佛
教」の十五篇、何れも史學雜誌その他に一度發表されて、
かなりの反響を當時の學界に喚起したものが少くない。

初期の親鸞研究から最近の切支丹研究まで、研究對象の
變移の爲めに苦惱はあれど、切支丹ミ佛教の比較研究は
かうした苦闘から來た著者の獨壇場ミ云つてよい。(菊
版一〇一九頁、東京麹町教育研究會發行、價一〇圓)

●概説日本佛敎史

橋川 正著

著者は數年來大谷大學で日本佛敎史を講述するに適當
な教科書のない不便を感じてこの概説を書いたのである
ミ云ふ。教理及び宗派僧團の變遷のみならず、その俗世
間に作した社會的意義を示すことに努力し、尙ほ美術工
藝の意匠の上にはれる佛敎的理念にも觸れて一つの
渾然たる佛敎文化史をなした。叙述の方法については特
別の新味はないが極めて用意周到で親切であるミ云ふこ
ミが出来よう。日本佛敎史全體の見通しをする爲めには
恰好の良書であるに相違ない(菊版三八七頁、東京文獻
書院發行、價二、五〇)(以上布村)

●武家時代の研究 第二卷 大森金五郎著

既刊の第一卷ミ共に源平時代を取扱ふ。先づ奥州藤原
氏の事業ミ文化に筆を起し次いで平氏の勃興ミ覆滅を叙
し源平交戦を説き頼朝奥州を征して天下統一の成つたこ
ころで終つて居る。著者の大日本全史のいはゞ各論をな
すものであるが故に「詳密なる大日本全史」ミいふべき感
じが興へられる。著者の懷抱する歴史地理的興味が隨所
にあらはれて居る點が一の特徴をなして居る。研究態度
については時代本質の把握について憾ミすべき點がない
でもない様であるがミにかくこの國史界の大先輩の力作
たるを思ひ愈その精進を祈る次第である。(菊判七四三頁
東京富山房發行、價三、三〇)

●日本庶民教育史

石川 謙著

そのサブタイトルに「近世に於ける教育機關の超封建
的傾向の發達」ミあるは問題の取扱に於ける著者の態度
をよく示すものである。この見解の下に著者は先づ近世
の學校論が君侯中心觀より士民本位ミなりし結果出席強
制、學校公營、萬人教育、教課目改造等が唱へられ聽て致